

=====

GCOE NewsLetter

[No.39 2010/12/27]

次回のオープンレクチャー

「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約

gCOE第11回国際研究集会の要約

グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

研究者招聘のお知らせ

=====

■ 次回のオープンレクチャー

2011年1月19日（水）18:00～

名古屋国際センタービル15階 グローバルCOEオフィスにて

講演者：阿部 泰郎教授（名古屋大学大学院文学研究科・比較人文学）

題目：“霊地”のテキスト学試論

—「生身」の聖徳太子と太子遺跡寺院のテキスト体系—

■ 「テキスト布置解釈学各論III」（講義科目）の要約

釘貫亨（2010年10月14、21、28日、11月4、11、18日）

日本語学は、言語学と伝統的日本語研究が合流して形成されている。日本語研究は、鎌倉時代の平安王朝文芸解釈の語学的技術であるテニヲハと仮名遣いに源流をもつ。それ以前にも古代以来の漢文注釈やインド音声学を基礎とする悉曇学が語学的知識として存在した。近世18世紀にテニヲハと仮名遣いが飛躍的に展開し古典語学の解釈体系が完成した。同時期に医学と兵学を中心にした蘭学が開始され、幕末には英学が洋学の一翼を担って日本人は西洋文法を知った。維新後、明治政府による公文書書式の規格化、各地の口語法調査や辞書制作など実用目的の日本語研究は、すべて近世以前の伝統的語学研究を原資にした独自の成果である。明治19年帝国大学に博言（言語）学科が開設され、以後近代科学としての国語学が立ち上がった。伝統的研究の継承を自覚する日本語研究者は、押し寄せる言語学の最新理論と葛藤した。記述文法の創始者山田孝雄は、まとまった思想内容の表明である文の定義に際して、西洋の文法学者の説明に飽き足らず、モノの存在に関する認識の在り方を洞察したカントの哲学から「統

覚Apperception」の概念を類推して適用し、文の存在を規定した。ソシュールのラングlangueを前提する一般言語学理論を批判した時枝誠記は、雑多な構成からなる言語経験を心的過程として均質化した言語過程説を対置した。その際、時枝はフッサールの現象学が提案する科学方法論批判を理論構築の柱とした。現象学の科学批判は、有坂秀世の「音韻＝目的観念」説にも影響を与えた。有坂の「音韻」は、物理的生理的な音声それ自体ではなく純粹経験として把握された心的表象としての「音韻」であり、そこに有坂の現象学的思索の跡が認められる。ドイツ哲学は、戦前の青年をとらえた教養主義の柱をなす知識であり、山田、時枝、有坂らは、言語学の圏外の学問に自らの正統性の根拠を求めた。日本語学の近代化に与えた教養主義の影響を認めることができる。

■ gCOE第11回国際研究集会の要約

2010年12月10日（金）～11日（土）

「文献学と解釈学の間」

名古屋大学（文学部1階大会議室・文系総合館7階カンファレンスホール）

にて開催

コーディネーター：松澤和宏（名古屋大学大学院文学研究科教授）

文学研究科グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」の主催による国際シンポジウム「文献学と解釈学の間」が、3名の外国人研究者を招いて、12月10日、11日の2日間にわたって名古屋大学文学研究科大会議室および文系総合館カンファレンスホールにて催された。まず最初に佐藤彰一拠点リーダーより英語での挨拶があり、ついで組織責任者の松澤和宏教授より趣旨説明の講演があった。テキストの「文字」を扱う文献学と「意味」を探る解釈学という二つの伝統的学問の複雑な相互依存性とそこに潜む解釈学的循環が提示され、ついでテキスト解釈が起源のコンテキストの復元をめざす実証主義と現在の文脈を投影しようとする立場に大別され、テキストはこの両極を巡回する∞の軌跡を描く根源的二重性を刻印されているとの指摘がなされた。フランス国立科学研究センターのフランソワ・ラスティエ博士の講演は、文献学的概念としての資料、言語学的概念としてのテキスト、解釈学的対象としての作品の三者関係を分節しながら、それらの関連性を文献学と解釈学を統合する記号学的観点から、保証、観点、媒体、価値などの概念を用いつつ考察した画期的なものであった。また福井県立大学のカレル・フィアラ教授の講演は、解釈の単位としての言語学的「文」概念に潜む規定不可能性の問題をめぐって、

西欧および日本における言語学史を踏まえた講演が行われた。二日目は、まずクレール・フォーヴェルグ特任准教授が18世紀フランスの百科全書が、論証的な目的というよりも、その知識の繋がりにより読者を未知の真理へ向かう解釈へ促す仕組みを備えていることを明らかにした。重見晋也准教授は、フォーコーの導入した「実定性」の概念が解釈学的な意味の複数性との対立を孕んでいることを明快に指摘した。ジョージア大学のサイモン・ギャトレル教授の講演は、「テキストの変遷を辿ることがいかに解釈に裨益することになるのか」という観点から、作家トーマス・ハーディに即して創作プロセスや校訂上の諸問題を取り上げ、句読点一つで意味が異なってくる具体例等をあげ、大変興味深い内容であった。上原早苗教授は、ハーディの『ダーバヴィル家のテス』の改変プロセスの分析を通して、作家自身が意図していなかった奇妙な物語が産み落とされたとするスリリングな生成論的解釈を提示した。明星聖子埼玉大学教授は、ドイツ、イギリス、フランスにおける「文献学」の語義をめぐる多様性や日本における文献学受容の問題点を報告し、ドイツの編集文献学を踏まえつつ編集と解釈の統合の必要性を説いた。最後に、鎌田隆行信州大学准教授の研究発表は、フランスの生成論が、過去の文献学との断絶を際立たせるあまり先人の成果を無視してきたことを、バルザック『農民』をめぐる20世紀初頭のロヴァンジュール子爵の文献学的研究の再評価を通して鮮やかに浮き彫りにした。

高度に専門的な内容でもあったにもかかわらず、東京や九州などから60名を超える熱心な参加者があり、各研究発表をめぐる活発な議論が英語とフランス語で交わされ、実り豊かな研究集会となった。（文責：松澤和宏）

■ グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

第27回ブリーフィング（2010年11月16日）

杉山 奈生子「18世紀フランス美術における人体表現について」

18世紀フランス美術に関わる言説は、アルベルティの『絵画論』（1435年）に始まるルネサンスの理論体系の枠組みを踏襲しつつも新たな展開を見る。人体表現においては、ファルコネの彫像に対するディドロのサロン評（1763年）のように、裸体の肉の柔らかさが生命賦与の証として提示される。これは、アルベルティやダ・ヴィンチの幾何学的傾向の強い絵画論よりも、ヴェネツィアのロドヴィーコ・ドルチェ著『アレティーノまたは絵画問答』（1557年）に源泉を辿ることができ、美術愛好家の側に立った、眼を悦ばせる、感性を重視した絵画論を推奨したロジェ・ド・ピールに継承される。ルーベンス著「古代彫刻

模倣論」(1708年、ド・ピール『絵画原理講義』所収)やファルコネ著「彫刻(美術)」(1765年、ディドロ/ダランベール編『百科全書』掲載)では、モデルとなる人間を生きているかのように模倣するミメーシスの理論を基盤にしつつ、裸体の繊細さや柔和さ、冷たい石や骨ではなく柔らかい肉の表現を重視している。この理論は、アントワーヌ・ヴァトーの雅宴画の彫刻モチーフや庭園彫刻の模写などで実践される。ただし、表象作品の解釈については、理論の実践という一方向的な解釈に陥ることなく、多様な視点を持ち合わせることを肝要であることも申し添えたい。

■ 研究者招聘のお知らせ

2011年1月23日より2月1日までの日程でプロヴァンス大学(フランス)よりクロード・ペレス教授を招き2回の講演会を予定しています。ペレス教授は19世紀フランス詩がご専門です。

講演の題目など詳細については追ってWebで紹介します。

次回のメール版NewsLetterの発行は2011年1月下旬を予定しています。

.....

GCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

NewsLetter No.39

発行：GCOE編集部

編集担当：平野克典

Copyright(C) 2010 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

.....